

必修クラブ実践の検討

——特に運動クラブに注目して——

神 谷 拓

1. はじめに
2. 研究方法
3. 理論体系
4. 実践の特徴
 - 4.1 オリエンテーション及び質問紙調査
 - 4.2 子どもの自治集団活動
 - 4.3 活動の評価
 - 4.4 必修クラブと部活動の区別
5. 課 題
6. ま と め

1. はじめに

本研究は、1969 年中学校学習指導要領において制度化され、1998 年まで実施されてきた必修クラブ¹⁾の課題について検討することを目的とする。

必修クラブとは、その名称が示すように「全ての者が必ず参加しなければならない」クラブ活動であり、多くの学校では週に 1 時間が割り当てられ、時間割にも組み込まれていた。つまりそれは、課外のクラブ活動（いわゆる部活動）とは異なる活動であった。文部省教科調査官の井上（1973, pp.108-109）によれば、必修クラブ制度化には「貴重な集団活動の経験を、すべての生徒が例外なしに共有できる体制の確立」が期待されていた。また、課外

の部活動においては「形式的にはすべての生徒に門戸を開放してはいても、実質的には、学年の進むにつれて増加する脱落者をいかんともすることができなかつた」という問題があり、そのような少数精鋭主義を改善する意図があったとも言われている。実際に、制度化当初の学習指導要領では、必修クラブの指導が「一部の生徒を対象とする選手養成などのための活動となつてはならない」と明記されていた(文部省, 1969a, p.246, 1970b, p.436)。

しかし、どのような目的があつたにせよ、果たしてクラブは必修化しなければならないほど重要なものであつたのだろうか。確かに、スポーツを楽しむうえでクラブ(組織・集団活動)が欠かせないことは、多くの研究者が指摘している。例えば伊藤(1983, p.11)は、本来、スポーツのプレイ場

面は、上司と部下、先輩と後輩の分け隔てなく楽しめるものであるが、何かトラブルが発生すると日常生活の上下関係が復活することがあり、プレイ場面の純粋性を保つにはクラブ場面における自由度の保障——民主的運営の徹底が不可欠であることを指摘している。この他にも、

荒井(1982, p.254)は、スポーツ(ウーマン)の心理的傾向や行動を実社会、クラブ、チームの3層から捉えている(図1)。また内海(1989, p.180)も、A スポーツそれ自体(技術場面)、B スポーツの組織、C スポーツの社会的意義(社会的条件)の

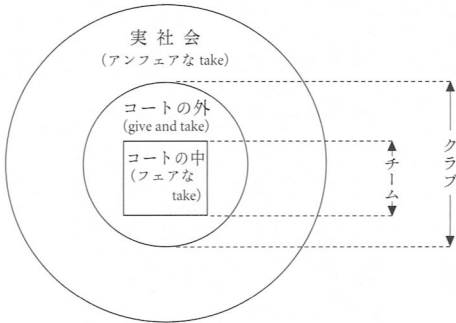


図1 スポーツの世界の構造(荒井, 1982)

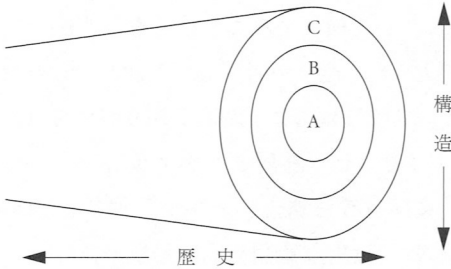


図2 スポーツ的世界の形成(内海, 1989)

視点から「スポーツの世界」を把握し、各層の取り組み及び整備が歴史的に拡大してきたことを指摘している（図2）。このように、現在、過去、未来のスポーツを語るうえでクラブという組織・集団活動は欠かせないものになっており、その観点に限定して捉えれば、クラブの必修化にも理解を示すことができる。

だが、そもそもスポーツやクラブ活動は、自主的、自発的、自治的に取り組むものであり、そのような性格と必修クラブ制度の間には大きな隔たりがあったと言わざるを得ない。例えば吉田（1993）は、必修クラブはクラブ活動のもつ教育的意義を全ての子どもに享受させようとした点においてすぐれた発想であったが、一方で必修になったことで「楽しくない」と感じる子どももあり、今後は「俱ニ楽シム」というクラブ（倶楽部）の本質に立ち返ることを提案していたが、自主的、自発的、自治的活動というクラブの性格を考えればこのような批判が出てくるのは当然であろう。実際にそのような矛盾を抱えていたこともあって、必修クラブは表1のような経過をたどって1998年に廃止されており、現行の学習指導要領（1998、1999）にはクラブや部活動に関する記述がない。

しかし近年、再び学習指導要領にクラブ及び部活動を位置づけることや、

表1 必修クラブ及び部活動（中学校、高等学校）の実施方法の変化

学習指導要領 改訂年	クラブが位置づけられた領域	クラブ及び部活動の実施方法
1969年 1970年	特別活動（中学校） 各教科以外の教育活動（高等学校）	① 必修クラブと課外活動〔部活動〕の差異化。必修クラブの時間外に行われる活動は、教育課程外・超過勤務手当の対象外の活動。
1977年 1978年	特別活動	② 必修クラブとともに、部活動も適切に実施する。
1989年	特別活動	③ 必修クラブと部活動の選択を認める。課外の部活動に参加することによって、必修クラブへの参加と見なす「代替措置」を認める。
1998年 1999年		④ 必修クラブ及び部活動に関する内容の削除。

そのための手当の整備が議論されている（産経新聞，2007.6.13 朝刊；東京新聞，2007.9.14 朝刊）。だが，教育制度上（現在は）クラブを行わなくなったのであり，それを再び位置づけ直すのであれば，これまでの問題や課題を整理するとともに，その改善策を視野に入れておかなければならないだろう。このような問題意識から，本稿では必修クラブの実践に注目し，その特徴や課題を検討していくことにする。

必修クラブは廃止されてから10年が経過したが，その実践を総括するような研究は行われていない。例えば，日本特別活動学会編『キーワードで拓く新しい特別活動』（東洋館）においては，必修クラブが廃止された理由として，必修クラブと課外の部活動の差異や関連の不明確さが挙げられているが（今野，2000）、「なぜ，教育現場でクラブと部活動の差異が明確でなくなったのか」については解説されていない。また筆者も，必修クラブが廃止された理由を，学習指導要領改訂の背景にあった「判例」の視点から解釈したが，必修クラブ実践の特徴や課題までは明らかにしていなかった（神谷，2007）。

2. 研究方法

本稿は，以下の手順で研究を進める。まず3において必修クラブの理論体系を明らかにする。具体的には，学習指導要領で示された必修クラブの目標，活動内容，指導方法に関する方針を総括する。次に4において，それらの方針に基づく実践記録に注目し，必修クラブ実践の特徴を整理する。なお，本研究においては運動・スポーツのクラブを研究対象とする。先に述べたように，必修クラブは部活動とは異なる活動として制度化された。その背景には，運動部活動指導に関わる超過勤務手当の問題があった。必修クラブの制度化により，時間割に組み込まれた週1時間の必修クラブの指導だけが教師の業務になり，教育行政は課外の運動部活動指導に関わる手当の支払い

を避けることができたのである（神谷，2007）。また先に述べたように，運動部活動に多く見られる少数精鋭主義の問題もあった。実際に制度化後，選手養成をめざす運動部活動の対外試合と，学校教育としての（必修クラブの）対外試合は区別されていた（文部省，1969b；青少年運動競技中央連絡協議会，1969）。これらのことから，ある意味，必修クラブは運動部活動のオルタナティブであったという見方ができる。したがって，文化系クラブよりも運動・スポーツクラブの実践に注目することによって，これまでの部活動指導との違いや必修クラブの特徴が鮮明になると考えられる。なお5においては，そのような運動・スポーツクラブ指導における課題を明らかにする。6においては，これまでの考察に基づいて今後の展望を示す。

3. 理論体系

まず，学習指導要領で示された必修クラブの目標であるが，それは「特別活動」，「各教科以外の教育活動」の目標として示されてきた（表2）。具体的には，① 自主的な生活態度（生活を築く態度）の育成，② 集団の一員としての自覚や協力する態度の育成，③ 心身の健康，発達と個性の伸長に整理することができる（表中の下線部が①～③に関連する文章である。どのカテゴリーと関連するかは下線の最後に番号を記している。以下も同様）。

① 自主的な生活態度の育成という目標は，1969年中学校学習指導要領において，「豊かな充実した学校生活を経験させ」ることによって，「健全な社会生活を営む上に必要な資質の基礎を養う」と記され，1970年高等学校学習指導要領においても「自律的，自主的な生活態度を養う」ことが明記されていた。その後も，1989年の学習指導要領まで「よりよい生活を築こうとする自主的，実践的な態度」の形成がめざされてきた。

次に，② 集団の一員としての自覚や協力する態度の育成に関しては，

表2 学習指導要領で示された必修クラブの目標に関する記述

学習指導要領の名称 / 目標が示された領域		
① 自主的な生活態度の育成	② 集団の一員としての自覚や協力する態度の育成	③ 心身の健康、発達と個性の伸長
1969年 中学校学習指導要領 / 特別活動		
第1 目標		
教師と生徒および生徒相互の人間的な接触 (②) を基盤とし、望ましい集団活動を通して豊かな充実した学校生活を経験させ (①)、もって人格の調和的な発達 (③) を図り、健全な社会生活を営む上に必要な資質の基礎を養う (①)。[p.245]		
1 自律的、自主的な生活態度を養う (①) とともに、公民としての資質、特に社会連帯の精神と自治的な能力の育成を図る。[p.245]	3 集団の一員としての役割を自覚 (②) させ、他の成員と協調し友情を深めて (②)、楽しく豊かな共同生活を築く態度を育て、集団の向上発展に尽くす (②) 能力を養う。 [p.245]	2 心身の健全な発達 (③) を助長するとともに、現在および将来の生活において自己を正しく生かす能力を養い、勤労を尊重する態度を育てる。 4 健全な趣味や豊かな教養を育て、余暇を善用する態度を養うとともに、能力・適性等の発見と伸長 (③) を助ける。[p.245]
1970年 高等学校学習指導要領 / 各教科以外の教育活動		
第1款 目標		
望ましい集団活動を通して豊かな充実した学校生活を経験させ、自律的、自主的な生活態度 (①) を養うとともに、民主的な社会および国家の形成者として必要な資質の基礎を育てる。[p.433]		
	1 人間として相互に尊重し合い (②)、友情を深める (②) とともに、集団の規律 (②) を遵守し、責任を重んじ、協力して (②) 共同生活の充実発展に尽くす態度を養う。 [p.433]	3 心身の健康を増進 (③) し、個性を伸長 (③) するとともに、人間としての望ましい生き方を自覚させ、将来の生活において自己を実現する能力を育てる。 4 健全な趣味や豊かな情操を育て (③)、余暇を活用する態度を養うとともに、勤労を尊

重なる精神の確立を図る。[p.433]

1977年 中学校学習指導要領 / 特別活動

第1 目標

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達 (③)を図り、個性を伸長する (③)とともに、集団の一員としての自覚を深め (②)、協力して (②) よりよい生活を築こうとする (①) 自主的、実践的な態度を育てる。[p.121]

1978年 高等学校学習指導要領 / 特別活動

第1 目標

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達 (③)を図り、個性を伸長する (③)とともに集団の一員としての自覚を深め (②)、協力して (②) よりよい生活を築こうとする (①) 自主的、実践的な態度を育て、将来において自己を正しく生かす能力を養う。[p.155]

1989年 中学校学習指導要領 / 特別活動

第1 目標

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達 (③)と個性の伸長 (③)を図り、集団の一員として (②) よりよい生活を築こうとする (①) 自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。[p.121]

1989年 高等学校学習指導要領 / 特別活動

第1 目標

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達 (③)と個性の伸長 (③)を図り、集団の一員として (②) よりよい生活を築こうとする (①) 自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。[p.217]

1969年中学校学習指導要領において「教師と生徒および生徒相互の人的な接触」,「集団の一員としての役割」,「協調し友情を深め」と記され、1970年高等学校学習指導要領においても同様の方針が示された。さらに、その後の学習指導要領(～1989年)においても、集団の一員としての自覚や協力する態度の育成という目標が一貫して示されてきた。

最後に、③心身の健康、発達と個性の伸長であるが、1969年中学校学習指導要領において「人格の調和的な発達」について明記され、その後も「心身の調和のとれた発達」,「個性の伸長」といった目標が一貫して示されてきた。

次に必修クラブの活動内容であるが、それは表3のように①共通の興味・関心をもった同好者集団による活動、②異学年、異学級集団による活動、③文化的、体育的、生産的活動に整理できる。

①共通の興味・関心をもった同好者集団による活動という内容は、1969年中学校学習指導要領において、クラブが「共通の興味や関心をもつ生徒をもって組織する」活動と記されて以降、1989年の学習指導要領まで一貫して明記されてきた。

②異学年、異学級集団による活動という内容も、1969年中学校学習指導要領において、「学年や学級の所属を離れて」行う活動と示されて以降、明記され続けた。

③文化的、体育的、生産的活動に関しても、1969年中学校学習指導要領において、それらの活動について記されて以降、「奉仕的な活動」(1989年中学校学習指導要領、高等学校学習指導要領)が加えられることもあったが、3つのカテゴリーはそのまま継承されてきた。

最後に指導方法であるが、表4のように①子どもの自発的活動や自治的活動を助長、援助すること、及び②子どもや学校の実態をふまえることが留意されてきた²⁾。

①子どもの自発的活動や自治的活動に関しては、1969年中学校学習指導

表3 学習指導要領で示された必修クラブの活動内容に関する記述

学習指導要領の名称		
① 共通の興味・関心／同好者集団による活動	② 異学年，異学級集団による活動	③ 文化的，体育的，生産的活動
1969年 中学校学習指導要領		
第2 内容		
<p>(1) クラブは，<u>学年や学級の所属を離れて</u> (2) <u>共通の興味や関心をもつ生徒をもって組織する</u> (1) <u>ことをたてまえとし，全生徒が</u>文化的，体育的または生産的な活動 (3) <u>を行なうこと。</u> [p.246]</p>		
1970年 高等学校学習指導要領		
1 内容		
<p>クラブは，<u>学年やホームルームの所属を離れて</u> (2) <u>共通の興味や関心をもつ生徒をもって組織する</u> (1) <u>ことをたてまえとし，次のいずれかに属する活動を行なう。</u></p> <p>(1) <u>文化的な活動</u> (3)</p> <p>(2) <u>体育的な活動</u> (3)</p> <p>(3) <u>生産的な活動</u> (3) [p.435]</p>		
1977年 中学校学習指導要領		
(3) クラブ活動		
<p>クラブは，<u>学年や学級の所属を離れ</u> (2)，<u>共通の興味や関心をもつ生徒をもって組織する</u> (1) <u>ことを原則とし，全生徒が</u>文化的な活動，体育的な活動又は生産的な活動 (3) <u>のいずれかの活動を行うこと。</u> [p.121]</p>		
1978年 高等学校学習指導要領		
C クラブ活動		
<p>クラブは，<u>学年やホームルームの所属を離れて</u> (2) <u>共通の興味や関心をもつ生徒をもって組織する</u> (1) <u>ことを原則とし，次のいずれかに属する活動を行う。</u></p> <p>(1) <u>文化的な活動</u> (3)</p> <p>(2) <u>体育的な活動</u> (3)</p> <p>(3) <u>生産的な活動</u> (3) [p.155]</p>		
1989年 中学校学習指導要領		
C クラブ活動		
<p>クラブ活動においては，原則として学年や学級の所属を離れ (2)，<u>共通の興味や関心をもつ生徒をもって組織する</u> (1) <u>クラブにおいて，全生徒が</u>文化的，体育的，生産的 (3) <u>又は奉仕的な活動のいずれかの活動を行うこと。</u> [p.122]</p>		
1989年 高等学校学習指導要領		
C クラブ活動		
<p>クラブ活動においては，原則として学年やホームルームの所属を離れ (2)，<u>共通の興味や関心をもつ生徒をもって組織する</u> (1) <u>クラブにおいて，全生徒が</u>文化的，体育的，生産的 (3) <u>又は奉仕的な活動のいずれかの活動を行うこと。</u> [p.218]</p>		

表4 学習指導要領で示された必修クラブの指導方法に関する記述

学習指導要領の名称	
① 子どもの自発的活動や自立的活動を助長、援助すること	② 子どもや学校の実態をふまえること
1969年 中学校学習指導要領	
(1) 〔指導計画を：筆者〕生徒の自主的、実践的な活動を助長 (①) しようように作成すること。この際、それぞれの内容の特質に応じて、できるだけ生徒がみずから活動の計画を立てる (①) ように援助すること。[p.251]	(2) クラブの種別や数は、 <u>生徒の希望</u> 、 <u>男女の構成</u> 、 <u>学校の伝統</u> 、 <u>施設設備の実態</u> 、 <u>指導に当たる教師の有無</u> (②)などを考慮して、適切に定めること。[p.246] (2) <u>地域や学校の実態</u> 、 <u>青年期の特性</u> 、 <u>生徒の個人差</u> (②)などを、じゅうぶん考慮すること。[p.251]
1970年 高等学校学習指導要領	
(1) 教師は、平素から生徒との接触を密にし、好ましい人間関係を育てるように配慮するとともに、適切な指導のもとに生徒が自発的、自立的な活動を展開しようように努める (①) 必要がある。[p.435]	イ <u>クラブの種別や数は</u> 、 <u>生徒の希望</u> 、 <u>男女の構成</u> 、 <u>学校の伝統</u> 、 <u>施設設備の実態</u> 、 <u>指導に当たる教師の有無</u> (②)などを考慮し、適切に定めること。[p.436]
(1) 〔指導計画を：筆者〕生徒の自主的、実践的な活動を助長 (①) しようように作成すること。この際、それぞれの内容の特質に応じて、できるだけ <u>生徒がみずから活動の計画を立てる (①)</u> ように援助すること。[p.438]	(2) <u>地域や学校の実態</u> 、 <u>青年期の特性</u> 、 <u>生徒の個人差</u> (②)などをじゅうぶん考慮すること。[p.438]
1977年 中学校学習指導要領	
2 指導計画は、学校の創意を生かすとともに、 <u>生徒の発達段階を考慮し (②)</u> 、 <u>生徒自身による実践的な活動が助長されるよう</u> に作成するものとする (①)。生徒活動については、教師の適切な指導の下に、 <u>特に生徒の自発的、自立的な活動が展開されるよう</u> に配慮する必要がある	

る (①)。[p.123]

1978年 高等学校学習指導要領

(1) 学校の創意を生かすとともに、生徒の発達段階や特性を考慮し (②)、教師の適切な指導の下に、生徒自身による実践的な活動を助長すること (①)。その際、勤労にかかわる体験的な学習の機会をできるだけ取り入れること。[p.156]

(2) 生徒会活動及びクラブ活動においては、生徒の自発的、自治的な活動 (①) を助長するとともに、生徒の立てる活動の計画に基づく展開 (①) となるように援助すること。[p.156]

1989年 中学校学習指導要領

(1) 学校の創意工夫を生かすとともに、学校の実態や生徒の発達段階などを考慮し (②)、教師の適切な指導の下に、生徒による自主的、実践的な活動が助長されるようにする (①) こと。[p.123]

3 生徒会活動及びクラブ活動については、教師の適切な指導の下に、生徒の自発的、自治的な活動が展開されるよう配慮する (①) もとする。[p.123]

1989年 高等学校学習指導要領

(1) 学校の創意工夫を生かすとともに、学校の実態や生徒の発達段階及び特性等を考慮し (②)、教師の適切な指導の下に、生徒による自主的、実践的な活動が助長されるようにする (①) こと。その際、奉仕的な活動や、勤労にかかわる体験的な活動の機会をできるだけ取り入れること。[pp.218-219]

(2) 内容のB及びCについては、教師の適切な指導の下に、生徒の自発的、自治的な活動が展開されるようにする (①) こと。[p.219]

要領において「できるだけ生徒がみずから活動の計画を立てるように援助すること」と記され、1970年高等学校学習指導要領においても「生徒が自発的、自治的な活動を展開しうるよう努める必要がある」と明記されていた。その後の学習指導要領でも、生徒の自発的、自治的活動として指導することが留意されてきた。

また、② 子どもや学校の実態をふまえることに関しては、1969年中学校学習指導要領や1970年高等学校学習指導要領において、「クラブの種別や数は、生徒の希望、男女の構成、学校の伝統、施設設備の実態、指導に当たる教師の有無」や、「地域や学校の実態、青年期の特性、生徒の個人差」等を考慮することが明記され、その後も「生徒の発達段階」や「学校の実態」を考慮することが示されてきた。

4. 実践の特徴

4.1 オリエンテーション及び質問紙調査

学習指導要領においてクラブが「共通の興味・関心をもった同好者集団による活動」と規定され、また、「子どもの自発的活動や自治的活動を助長、援助すること」及び「子どもや学校の実態をふまえること」が留意されていたこともあり、必修クラブの実践においては、オリエンテーションが重視された。例えば、図3のようにオリエンテーション→クラブ説明会→クラブ見学→仮登録→仮活動→本登録といった流れでクラブを選択させる方法が用いられていた(山田, 1974, p.186)。

また、子どもに行いたい種目を聞く質問紙調査(図4)が実施されてきた(中本, 1974。他, 横浜市立金沢中学校, 1972; 石井, 1976a; 城井, 1977)。しかし調査の結果、希望の種目が107種類に及ぶこともあり(奈良県立添上高等学校保健

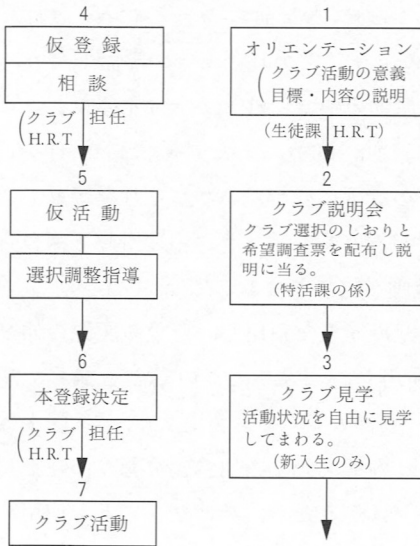


図3 クラブ決定までの手順 (山田, 1974)

The form is titled 'クラブ活動に関する調査' (Survey on Club Activities). It includes a header for '年 組 番 氏名' (Year, Class, Number, Name) and a large empty box for the student's response. The text of the survey asks: 'クラブ活動は、時間割の中に一時間、クラブ活動の時間を設けて、全員で必ず加入して行なうことになりました。そこで皆さんはクラブ活動でどんなことがやりたいか、一つ書いて提出して下さい。それによって、どんなクラブをつくるか考えてみたいと思います。' (Club activities will be set for one hour in the timetable, and everyone must join. So please write down what you want to do in club activities, and submit it. We want to see what kind of clubs we can create based on this.)

図4 クラブ活動に関する調査 (中本, 1974)

体育科, 1974, p.170), 全ての子ども達の要求に応えることは不可能であった。したがって第1希望から第3希望ぐらいまでをたずね、学校の施設に応じた種目を決定し、話し合い等を通して子ども達を割り振る方法が一般的であった。

4.2 子どもの自治集団活動

学習指導要領において「集団の一員としての自覚や協力する態度の育成」がめざされていたこともあり、自治集団活動としての指導が重視されていた(相川ら, 1970, pp.100-109)。例えば城井(1977, p.93)は、① 生徒自らの手で活動の基本方針と詳細な活動計画を立案させ、クラブは自分たちの活動であるという意識をもたせる、② 学年の枠を超えてお互いに励ましあう場を毎

時間の活動の中に必ず組み込む、③ 活動に入る前にミーティングを行って、各自の持ち味がどの場面で、どのように生かし合えるかを話し合う、④ 各自に何らかの役割を分担させ、活動の中でそれらが十分発揮できるように心がける指導をしていた(他、長谷川、1974)。また同様に高橋(1974, pp.149-150)も、「粗末ではあってもその計画に愛着があり、それを続けていくことによって生徒の自主性、計画性は育てられ、クラブの連帯感も深められる」と考え、生徒に表5のような計画を立てさせていた。

練習や大会に関しても、① 個人記録カードを利用し、自分の記録の伸びがわかるようにする、② ビデオを利用し、一人ひとりの動きを撮ってやり、フォームの研究をさせる、なお、教材のビデオも利用する、③ 陸上競技に関する記録を校内に掲示する、④ 各種大会の参加希望を募り、陸上に対する興味をもたせる、⑤ 知的理解をはかるため、学習プリントを使用す

表5 指導計画[生徒作成](高橋, 1974)

クラブ名	クラブ員数	活動目標												
卓球	1年 12名 2年 13名 3年 20名 計 45名	1. 卓球のおもしろさを体得させ、レクリエーションとして活用できるようにする。 2. 活動をとおして、積極性と協調性を豊かにする。 3. 卓球のゲームでロングとショートを使って応戦できるようにする。	月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3
年間活動計画	・オリエンテーション ・係や班の作り方について ・クラブの目標や計画について話す	・組織づくり ・練習計画を立てる ・班ごとに練習する	(1)(2)(3) ・フォアハンドからサーブ対ショートレシーブ ・ロングの打ち合い ・ショートの打ち合い	・ゲームの方法、理解 ・反省会 ・全体で活動方針を考え話し合う	・試合のルールを知る	・楽しいゲーム ・班別に対抗試合を行なう	・班別に対抗試合で得た弱点について練習する ・班別に分かれて作戦を立て反省する	・二学期の反省 ・全体で反省して三学期の活動内容を有意義なものにする	・三学期の活動準備 ・計画に従って個人戦を行なう(敗者復活戦) ・班を離れて個人戦の計画を立てる	・一年間の活動のまとめ ・まとめを各自が書く	・クラブ発表の準備について話し合う ・反省をもとにして話し合う			

る、そして⑥走りたくなるような環境づくりといった試みによって、自治集団活動がめざされた（加藤，1985，pp.102-104）。

さらに、このような個別のクラブの運営だけではなく、①クラブ特設特別委員会、②クラブ役員会、③クラブ運営委員会、そして④クラブ長、班長会議を設けることによって、学校全体の必修クラブを自治的に運営させる実践も行われていた（押田，1975，p.88）。

4.3 活動の評価

学習指導要領において「自主的な生活態度（生活を築く態度）の育成」や「集団の一員としての自覚や協力する態度の育成」がめざされていたこともあり、自分たちの活動を総括する評価活動が重視されていた。それは、子どもたちの話し合いや、毎時の活動ノートへの記述を通して行われていた。例えば、井出（1974，p.181）は「クラブ活動記録簿」を作成し、活動状況欄には①実施した内容、②クラブ長、リーダー、クラブ員の動き、③指導教師やクラブ長のしたこと、④計画の変更とその理由、⑤その他の項目を設け、また反省欄には①集合、あいさつ、出席、準備、活動内容、整理等、②個人、グループ、全体についての反省、③技術的な面、精神的な面、④活動目標、努力点、⑤その他の項目を設けて子どもに記入させていた。また、図5のような自己評価用紙を作成する学校もあった（庵跡，1977，p.94。他，横浜市立金沢中学校，1972；高橋，1974；城井，1977）。

4.4 必修クラブと部活動の区別

必修クラブ制度化に伴い、必修クラブと課外の部活動とが区別されるようになったため、そのことを意識した実践にも取り組まれてきた。具体的には、部活動に所属している子どもは、異なった活動内容のクラブに所属させ

＜クラブ活動の反省＞昭和 51 年度〔前期・後期〕

所属クラブ〔 〕第()学年()組〔男・女〕氏名〔 〕

○クラブ活動について、次に掲げる項目を五段階で評価してみよう。

○五段階評価は次のとおりです。

1. 非常に悪い 2. 悪い 3. 普通 4. 良い 5. 非常に良い

○下の表の評価の欄に 1～5 の数字を記し、さらに合計点、平均点まで書きなさい。

1. あなたのクラブでは、クラブ活動計画を立案する際には、みんなで充分話し合って計画を立てましたか。
2. あなたのクラブでは、活動計画に従い活動そのものがスムーズに展開されましたか。
3. あなたのクラブでは、自分たちで決めたままりをしっかりと守ることができましたか。(時間の厳守など)
4. あなたのクラブでは、クラブ活動に必要な用具、資料、材料などの準備がよくなされましたか。
5. あなたのクラブでは、お互いに協力し合い、楽しくクラブ活動がなされましたか。
6. あなたはクラブ長や各係の指導、助言を自分から積極的に受けようとしていましたか。
7. あなたは趣味、技能、知識、体力などを深め、広げ、伸ばすためにどうしたらよいか、常に問題を自分で発見しつつ、粘り強く活動しましたか。
8. あなたはクラブ活動をするとき、よく考え、工夫をして活動しましたか。
9. あなたは趣味、技能、知識、体力などを深め、広げ、伸ばせましたか。
10. あなたは、クラブ顧問の先生の指導、助言が適切かつ充分であったと思いますか。
11. あなたは、クラブ活動を振り返って充実感、満足感を覚えますか。

項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	合計点	平均
評価													

図 5 必修クラブの自己評価用紙(庵跡, 1977)

る方法(もしくは同じ種目を設定しない方法)が用いられた。例えば、体育系の部活動に所属している生徒は、必修クラブにおいては文化系のクラブに所属するといった方法や、3カ年で文化的クラブ、体育的クラブ、生産的クラブの各分野を経験させる方法が用いられていた。さらに、クラブと部活動で同じ種目を設定するときは担当の教師を変える学校もあった³⁾。また、部活動のような選手養成の活動になることを避けるため、対外試合を行わないことを明示することもあった(奈良県立添上高等学校保健体育科, 1974; 山田, 1974, p.184)。

5. 課 題

必修クラブ実践は、課題も多く抱えていた。それは、以下の点にまとめられる⁴⁾。

- ① 活動時間が短い。
- ② 施設・設備、経費が不十分である。
- ③ 屋外で行うクラブに関わる雨天時の活動の問題。
- ④ 必修という形態とクラブの特質（子どもの自主的活動）との矛盾。
- ⑤ 指導方法が不明である（子どもの能力差の問題等）。
- ⑥ 部活動との違いが不明である。

例えば、①に関しては清掃を昼休みに行う、朝のうちに全員が着替えを済ませておく（石井、1976b, p.86）、ロングホームルーム・タイムと組み合わせて100分の時間を確保する（加藤、1978, p.24）、自由時間における個人練習を勧める（倉持、1977, p.87）といった試みによって、できるだけ時間を有効に利用することがめざされてきたが、それでも十分ではなかった。

また、② 施設・設備、経費に関しても、必修クラブを実施するうえで欠かせない教育制度的条件であったが十分に整備されなかった。既に1972年には、保健体育審議会答申「体育・スポーツの普及振興に関する基本方策について」において、「指導者の確保とその資質の向上、施設・設備の整備・充実等について格段の配慮をする必要がある」と問題点が指摘されていた。

このように教育制度的条件が未整備な状況においては、必修クラブと部活動を区別せずに、同じ活動として位置づける学校も出てきた（田沢、1974；小黒、1977；野崎、2003）。すなわち、「あの施設設備で、また1週1時間という

限られた時間内の指導や職員の指導経験の面から、必修クラブのねらう好ましい人間関係が、真の友情が、興味や関心の追求が、図れるものか真剣に考え実践すればする程疑問が残る」のであり、「必修クラブで不足している技術的な面や心身の鍛練的な面を部活動で補い、〔そのことによって：筆者〕充実したクラブ指導ができる」と考える学校も少なくなかったのである（福原，1973，p.150）。文部省もこのような実態を把握しており、教科調査官の山川（1974，p.21）は、その原因を「施設・設備や指導教師の不足という条件のほかに、クラブ活動〔必修クラブ：筆者〕実施に共通理解が得られないところに大きな壁があるようである」と述べていた。いずれにせよ、教育制度的条件が整備されなかったことを背景に、必修クラブと部活動の違いは曖昧になっていった。

また、④ 必修という形態とクラブの特質（子どもの自主的活動）との矛盾が指摘されていた。前章で検討したように、必修クラブの実践ではオリエンテーションや質問紙調査が実施されてきたが、教育制度的条件が整備されない状況においては、子どものニーズに応えることにも限界があった。また、そもそも週1時間という限られた時間では、子どもの自治集団活動を育む余裕がなかった。そのため、子どもにとっては毎週1時間「やらされる」活動にならざるを得なかった。

練習や試合においても、全ての子どもが参加する必修クラブにおいては部活動以上の能力差が生じた。それを改善するには、個別指導や能力別活動に向けた指導者の増員や施設・設備の整備が不可欠であったが、そのような条件整備は進んでいなかったのである。

これらの問題によって必修クラブの指導に熱意をもてない教師もおり（船田，1979，pp.45-46）、また、子どもにとっても、満足のゆく活動にはなっていない（森田・池上，1973，p.40；加藤，1978，p.22）。武笠（1975，p.19）によれば、ある中学校では必修クラブに不満を表明する生徒が40%程度もおり、彼らも教師と同様に施設・設備の不備、活動回数・時間が短いこと等を

問題に挙げていた。

6. ま と め

本稿で検討したように、必修クラブの実践は「教育制度的条件の未整備」という制約下に置かれていた。そのため、「全ての者が参加する（満足する）活動」という方針とは裏腹に、実際の指導では様々な問題が発生していた。最後に本稿のまとめとして、このような必修クラブ実践から汲み取るべき課題や今後の展望を示しておきたい。

まず、今後どのような教育目標に基づいてクラブや部活動を実施するとしても、それを可能にする教育制度的条件の整備が重要である。必修クラブも、満足のゆく指導が受けられる教育制度的条件が整備されれば、全ての子どもが楽しめる活動になるはずであった。だが実際には十分に整備されなかったのであり、そのような見通しが立たないのであれば、必修という方法を取るべきではなかったとも言える。今後クラブ及び部活動を学校教育に位置づけるうえでも、施設・設備や指導者といった教育制度的条件の整備が重要な課題であり、それが指導場面に反映すること（指導場面を規定すること）は必修クラブ実践の課題からも明らかであろう。

しかし一方で、「全ての者が参加する（満足する）活動」という必修クラブの理念自体は否定されるべきではない。学校の施設・設備は全生徒が活用する権利があり、「子どもの権利条約」を見ても結社・集会の自由（第15条）や、休息・余暇、遊び、文化的・芸術的生活への参加（第31条）が明記されている。だが、繰り返しになるが、教育制度的条件が整備されない状況においては、必修という方法を用いるべきではないであろう。別項で論じたように、既存の運動部活動に校内スポーツ振興の役割を担わせ、校内サークル（第2サッカー部）を誕生させた実践もある（神谷・高橋、2006）。このように

現状の運動部活動を指導，改善していくことによって，「全ての者が参加する（満足する）」クラブ及び部活動をめざすことが現実的であると思われる。

〔注〕

- 1) 本研究においては，中学校と高等学校における運動・スポーツの必修クラブを対象とする。クラブと部活動という用語の区別に関しては，時間割に組み込まれた活動（必修クラブ）を示すときはクラブとし，それ以外の活動を示すときは部活動及び課外のクラブとする。そして，双方の活動を示すときはクラブ及び部活動と記す。
- 2) この他にも，目標，内容（表2，表3）で書かれていた記述が，指導方法の留意事項として再び記されることもあったが，重複を避けるため表4では取り上げないことにする。
- 3) 本文中の内容は，志村（1971），横浜市立金沢中学校（1972），森田・池上（1973），中本（1974），新潟（1974），押田（1975），青野（1977），加藤（1985）の論稿を参考にした。
- 4) 本文中の内容は，前川（1973），富浪（1973），奈良県立添上高等学校保健体育科（1974），滋賀県立長浜商工高等学校体育科（1974），野口（1974），相沢（1974），野川（1975），鳥取県立米子東高等学校（1975），石川（1976），石井（1976b），金井（1977），入倉（1977），賀川（1977），中村（1985）の論稿を参考にした。

〔引用・参考文献〕

- 相川高雄・大石勝男・時松茂親・比留間一成編（1970）中学校全員参加のクラブ活動．文教書院
- 相沢富司夫（1974）クラブ活動と部活動の関係とその運営．学校体育 27(14)：88-91
- 青野雅之（1977）競技会めざし週1回の活動も前向きに．学校体育 30(10)：28-31
- 荒井貞光（1982）スポーツクラブの育成．平澤薫・糸野豊編，幼児・児童・青年・成人・高齢者のための生涯スポーツ．ほるぷ出版，pp.246-261
- 庵跡征洋（1977）必修クラブ活動と評価．学校体育 30(13)：92-95
- 飯田芳郎（1973）必修クラブの趣旨とその意義．体育の科学 23(3)：131-133
- 石井功樹（1976a）完成年度を迎えた中学校の必修運動クラブ．学校体育 29(7)：78-80
- （1976b）クラブ実施上の問題点とその解決．学校体育 29(8)：86-89
- 石川勝教（1976）完成年度を迎えた全員参加の必修クラブ活動——その現状と問題点——．学校体育 29(5)：85-89

- 井出堅司（1974）14年目の必修クラブ．学校体育 27(13)：175-181
- 伊藤高弘（1983）スポーツの時・空間（論）研究の意義．運動文化研究（1）：4-12
- （1986）スポーツの構造と認識．伊藤高弘・草深直臣・金井淳二編，スポーツの自由と現代．青木書店，pp.3-15
- 井上治郎（1973）必修クラブ活動のめざすもの．季刊教育法（7）：107-112
- 入倉富夫（1977）必修クラブと部活動はいかにあるべきか．学校体育 30(10)：8-15
- 内海和雄（1989）スポーツの公共性と主体形成．大修館，pp.180-185
- 小黒英作（1977）部活動を学校で行った場合の必修クラブ．学校体育 30(10)：22-26
- 押田茂（1975）加入クラブ決定までの準備体制づくり．学校体育 28(6)：85-89
- 賀川昌明（1977）クラブ活動実施に関する生徒と保護者の反応．学校体育 30(4)：98-103
- 加藤弘二（1985）一人ひとりが生き生きと取り組むクラブ活動をめざして．学校体育 38(7)：98-105
- 加藤三郎（1978）必修クラブを見直す．体育科教育 26(8)：22-25
- 金井賢二（1977）必修クラブの指導体制．学校体育 30(10)：36-41
- 神谷拓・高橋健夫（2006）中村敏雄の運動部活動論の検討．体育科教育学研究 22(1)：1-14
- 神谷拓（2007）必修クラブの制度化と変質過程の分析——クラブ，部活動に関する「判例」を中心に——．スポーツ教育学研究 26(2)：75-88
- 北川邦一（1995）学校の運動部活動・クラブ活動のあり方の検討——文部省の指針・施策におけるその学校教育上の位置づけ——．大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院「研究集録」（15）：1-26
- 倉持守三郎（1977）クラブ員の技能差に応じた経営と指導④．学校体育 30(1)：85-87
- 今野正保（2000）クラブ活動．日本特別活動学会編，キーワードで拓く新しい特別活動．東洋館，pp.108-109
- 産経新聞，2007.6.13 朝刊
- 滋賀県立長浜商工高等学校体育科（1974）全員参加クラブと運動部活動についての一考察．学校体育 27(3)：163-167
- 志村英夫（1971）本校（大田区立石川台中）における必修クラブの実態について．学校体育 24(10)：17-21
- 城井秀寿（1977）生徒の興味・関心を生かしたクラブの種類や数の決定とその指導．学校体育 30(12)：92-95
- 青少年運動競技中央連絡協議会（1969）児童生徒の参加する学校教育活動外の運動競技会の基準．体育スポーツ総覧 例規編．ぎょうせい，pp.4821-4822

- 高橋忠男 (1974) 励まし合い磨き合う楽しいクラブ活動. 学校体育 27(13): 145-153
- 武笠康夫 (1975) 部活動の停滞と必修クラブの功罪. 体育科教育 23(12): 17-19
- 田沢清作 (1974) 生き生きさせるクラブ活動の推進——クラブと部活動の一元化運営——. 学校体育 27(13): 118-124
- 東京新聞. 2007.9.14 朝刊
- 鳥取県立米子東高等学校 (1975) わが校の必修運動クラブと運動部. 学校体育 28(6): 47-51
- 富浪良夫 (1973) クラブ活動の現状と問題点. 体育の科学 23(3): 138-140
- 中村昌平 (1985) 自主的活動こそ楽しさがある——高校における必修クラブをどうしたらよいか——. 学校体育 38(7): 106-114
- 中本一成 (1974) わが校における必修運動クラブの実際——クラブ決定までの過程を中心に——. 学校体育 27(13): 125-131.
- 奈良県立添上高等学校保健体育科 (1974) すべての生徒が意欲的に参加し活動するクラブ活動 (必修クラブ). 学校体育 27(3): 168-173
- 新潟精弥 (1974) 豊かな人間性の育成をめざして. 学校体育 27(13): 159-165
- 野川淳司 (1975) きめ細かい指導体制で問題点の克服を図る. 学校体育 28(6): 38-41
- 野口七郎 (1974) クラブ活動の運営と指導上の問題点. 学校体育 27(5): 72-74
- 野崎耕一 (2003) 必修クラブ活動の廃止と今後の部活動の在り方について. 静岡産業大学国際情報学部研究紀要 (5): 95-113
- 長谷川輝 (1974) 生き生きとしたクラブ作り. 学校体育 27(13): 138-144
- 福原仲次 (1973) 中学校における必修クラブと運動部の現状と問題点. 体育の科学 23(3): 147-150
- 船田昭介 (1979) 体育的クラブ活動のあり方と問題. 学校体育 32(11): 43-48
- 保健体育審議会 (1972) 体育・スポーツの普及振興に関する基本方策について. 体育・スポーツ指導実務必携 (平成8年版). ぎょうせい, pp.1940-1957
- 前川峯雄 (1973) 「必修」クラブ活動と運動部活動——問題の所在——. 体育の科学 23(3): 126-130
- 森田武・池上浩至 (1973) じょうずな子どもの運動欲求を満たす方法. 学校体育 26(4): 36-40
- 文部省 (1969a) 中学校学習指導要領
- 文部省 (1969b) 児童生徒の運動競技について. 体育スポーツ総覧 例規編. ぎょうせい, pp.4822-4824
- 文部省 (1970a) 中学校指導書 特別活動編
- 文部省 (1970b) 高等学校学習指導要領

- 文部省（1977）中学校学習指導要領
文部省（1978）高等学校学習指導要領
文部省（1989a）中学校学習指導要領
文部省（1989b）高等学校学習指導要領
文部省（1998）中学校学習指導要領
文部省（1999）高等学校学習指導要領
山川岩之助（1974）必修運動クラブの現状，学校体育 27(13)：12-23
山田英生（1974）本校における必修体育的クラブの運営と指導，学校体育 27(13)：
182-191
横浜市立金沢中学校（1972）全員参加のクラブ活動の具体的方策，学校体育 25(2)：
146-158
吉田武男（1993）クラブ活動の教育的意義とその問題点——わが国の中学校におけ
るクラブ活動の史的変遷をてがかりとして——，関西外語大学研究論集（58）：
153-167